

語り継ごう、明日へ。



歴史はいつも未来へのみちしるべです
世の中の進むスピードと自分の生きていくペースが
少し合わなくなってきたなと感じ始めたら
いつか来た道まで戻ってみましょう

遊びながら
覚えたことー

スノーボーダーや若いスキーヤーが立ち入り禁止区域に入って危ない目にあう事故がよく聞かれます。マナーを知らないとか人の迷惑も考えないということも指摘されますが、根本の原因ではないように思われます。そこへ行ったらどうなるか、危険の予知、察知能力のようなものが欠けているのではないのでしょうか。かつてそれは、幼少年期に養われていたはずのものでしたのですがー。スキーもスケートも簡単には手に入らない時代によくやったかまくらづくり。単純に雪を積み上げて穴ぼこをつくる遊びのようですが、安全なものにしていく知恵、雪が落ちてきたときの対処、ほこらの中は意外と暖かいことなどを、知らないうちに身に付けていったのです。街の真ん中、道端で、でしたね。

ひと街ごと No.22

- ・時の街角／旧来正旅館—— 2
- ・マチの博物館／文林堂四言齋—— 3
- ・あるばむレトロポリス／札幌駅・駅前通り—— 5
- ・川筋を行く／石狩川—— 5
- ・来た道行く道／遠藤製靴店—— 6
- ・道具で道草30年—— 7
- ・時計のある風景—— 8

二〇〇八年冬(年四回発行)

発行：(社)印刷紙工

札幌市中央区南十五条西十八丁目
TEL(011)561-1597

編集：ひと街ごと刊行会

札幌市中央区北一条西十七丁目 北海道不動産会館四階
(株)編集工房海内 TEL(011)633-1651

時の街角

北海道開拓の村から

人のおいと構造材の年輪が混じり合って独特の安らぎの空間を醸し出す旅の宿。しやれたホテルがあちこちにそびえる現代ですが、そんな旧来の日本旅館の原点のような、汽車や馬車の待合所も兼ねた旅館です。

元屯田兵が建てた純和風の旅人宿

旧来正旅館 大正八年（一九一九）建築

伊藤廣という屯田兵の子孫の方の著書『屯田兵物語』（北海道教育社の巻末に、屯田兵七千三百七十三人の出身県別の名前と入植地の一覧

が載っています。その高知県の欄に、東永山兵村に入った来正策馬の名前が。入植年月は明治二十四年（一八九二）七月です。

屯田兵の前職？ といえは、当初は御一新によって没落した武士。北海道開拓と同時に、武芸の心得をロシア南下への警備に役立てるためでした。その募集枠が平民にまで広げられるのが明治二十三年のこと。つまり来正策馬来道の前年でした。

入植平民のそれまでの生業ですが、多くは農家の次男、三男坊。どんなにがんばっても家を継げない、田畑を持たないのだから北海道に新天地を、ということだったでしょう。ところがこの策馬、土佐藩主、山内容

堂の御典医の家に生まれているのですから、生活は恵まれていたはず。これこそ、異郷で一旗、組の典型だったのかもしれない。

策馬が入植した東永山兵村は、現在の旭川市永山地区。明治三十一年に退役後、同年に開設されたばかりの宗

谷本線永山駅前で、永山村役場に勤務しながら待合所を開業しました。丁度、永山からさらに奥地へ入った当麻、愛別などの開拓が始まった時期でもあり、そこで働く人たちが旅行者で繁盛しました。しかし、大正七年（一九一八）の石狩川の洪水で大きな被害を受け、翌年に建てた旅館兼待合所がこの建物です。

一見したところ、北海道ではめずらしい純和風。当時はやっただ洋折衷の要素はガラス戸ぐらいなもので、入母屋屋根と漆喰壁の白さが目を引きます。屋根の上の、近隣の火災の際に類焼を防ぐため

の天水桶も、道外出身の棟梁の発想でしょう。二階の長い廊下のガラス戸は一つところに収められるようになっており、天気の良い日は緑側にもなるという趣向です。

汽笛や馬車の音が聞こえてから腰を上げて間合ひする、のどかな世相が浮かびます。

宿泊客の部屋、ガラス戸の長い廊下待合室なども含めて大規模な造り旭川では冬が大変だったと想像される



洋の要素は二階のガラス戸くらいで漆喰壁の白さが目立つ純和風旅館。屋根の上の天水桶は雨水をためておいて防火用に

規模は問わず、どこにもない品揃えなら立派な博物館
 書道用品なんてどうでしょうかと
 どなたの心にも眠っている毛筆への憧れが
 店主の深い造詣を聞きながら花開いていくはずですよ

文房四宝がいぎなう

書の世界 深く！



最大級の篆刻用の石
 店主が彫ってくれる

ルを送っています。

店内にはその四宝の
 数々が並べられています。
 いちばん目に付くのはやはり筆。大半は
 馬の毛ですが、「イタチは墨の含みとま
 とまりが良く、適度の弾力があって言う

書道用品専門店というのもめずらしい
 し、店名もユニークなのですが、店主の
 萱仁文さん（六三）の姓がまず気になり
 ました。聞けば萱さんは岡山県出身で、
 萱のほかには茅や樵という字の同級生もい
 たそうです。関西の大学に進んだ後、奈
 良県の墨のメーカーに就職して全国を営
 業で歩き、札幌へ来たのが昭和四十八年
 のこと。九年間の勤務を経て、縁あって
 広島県の筆の会社の支援を受けて北海道
 文林堂を名乗りました。こちらは仕入れ
 部門で、筆一本から販売する部門に
 「四宣齋」と名づけたのです。

四宣齋とはどんな意
 味なのか。ここで思い
 出していただきたいのが文房四宝という
 言葉。筆、墨、紙、硯のことです。宣は
 広める、齋は書齋の齋、つまり部屋
 バブル崩壊以後、子供たちの書道人口が
 めっきり減り、個人商店へと経営形態は
 変わりましたが、仕事が忙しくてなかな
 か毛筆を握れなかつた退職世代にもエー



もう何年毛筆を握っていないだろうーずらり並ぶ筆を見れば、もう一度の意欲が

店主が傾ける「筆・墨・紙・硯」のうんちくも楽しい。



店主の萱仁文さん
 この道40年で知識も豊富

ことなし（萱さん）。値段は二、三万円
 するとのこと。もちろん高級なものばかり
 りでなく、値段も用途も様々。書のジャ
 ンルは漢字、かな、近代詩文、墨象、篆



筆に墨、硯、そして水滴（水指）
 これで半紙に向かう



一般の文房具店とは異なる専門店ならではの筆の数々

刻の五部門に分かれていますから、興味
 のある方は、この道四十年の萱さんの話
 をじっくり聞くとよいでしょう。
 ちなみに萱さんは毎日書道展篆刻部門
 の、北海道に二人しかいない会員の一人
 です。篆刻とは木や石に文字を彫ること。
 これを押印して書の完成です。号は萱登
 柳。あなたの「点睛」を彫ってもらって
 はいかがでしょうか。赤ちゃんのまだハ
 サミを入れていない毛髪で作る胎毛筆の
 注文も受け付けていますので、子や孫の
 誕生記念にどうぞ。



店
 本郷通商店街の一角
 四宝それぞれの文字が
 そのまま店の看板に



昭和十三年、三代目駅の前で
前年に日中戦争は始まっているがのどかな光景

平成7年2月に撮影した旧札幌駅
わずか10数年前のことだが
ずいぶん昔のことのように感じる



あるばお レトロポリス

昭和十三年（一九三八）に撮影された一枚の写真があります（左上）。札幌駅前で、おめかしした幼子と写真に納まる若いお母さん。季節が分かりませんが、秋なら七五三の行き



昭和四十六年四月の札幌駅前通り
数珠つなぎの市電で大混雑
（上三枚とも札幌市写真ライブラリー提供）

帰りでしょうか（セーラー帽ですが）、じつにはほろほろしい光景です。バスの行先表示に茨戸と石狩とあるののどかです。この駅舎は明治四十年（一九〇七）に建てられた三代目。その後、昭和三十二年にバトンタッチした四代目（右上）は、多くの人の記憶にあるところでしょう。一階南側中央に出っ張りがあり、ここに緑の窓口がありました。外には、指定券を手に入れ

る人が早くから並んだり、ミツパチ族のたまり場だったりしたことも。地下にはデパートや映画館などが併設され、昭和四十六年に札幌地下鉄開通でコンコースが、高架駅になる六十年まで道民や旅行者に親しまれました。そして平成十三年には北口広場が完成。同十五年のJRタワー開業で、札幌と周辺の商圏地図ががりりと塗り変わりました。駅ばかりでなく駅前通りの姿ぼうも隔世の感があります。写真上は昭和四十六年に撮影されたもの。札幌市は前年に人口百万人を突破し、翌年にはオリンピックを控えています。

駅前には数珠のように連なる市電の数を確認

北の都の変遷映し 想い出も行き交う

わが街の発展と衰退をそのまま映す鉄道路駅。毎日、様々なドラマを抱えた人たちの乗降です。札幌駅のあのころ、あなたにはどんな思い出が――

札幌駅・駅前通り



平成15年JRタワーの開業
右はその38階から見下ろす札幌駅



できるでしょうか。手前には、連結車でないといすれば五台ほどが。その向こうに一台。そして苗穂方向に曲がる二台。さらにグランドホテル前に停まっているのが二台。と、わずかな距離に九台がひしめいているのです。これでは百万都市の交通も限界。すでに地下鉄は完成間近で、市電廃止は既定路線でした。あれから何年たったのかなあ――駅にまつわるあなたのドラマ。一つ、二つと思えば返されましたか。

石狩川

川筋を行く

人と川の
様々な
かわりを
かかわりを
たずねて

当別町今昔

明治の開拓入植と 現代の「快適移住」

札幌からJRを利用すれば約四十分で着く当別町。伊達藩の歴史が色濃く残る一方で、団塊移住地としても熱い視線を浴びています。百九十九万人都市の隣町に大河がもたらしたものは、緑豊かで落ち着いた暮らしのようです。

伊達主従の苦闘しのぶ

伊達藩の開拓入植といえは、道南・伊達市がよく知られています。が、当別町もまたそのゆかりの地ということを知る人は少ないかもしれません。話の始まりは石狩川です。

石狩川河口右岸、地図上での地名は聚富（石狩市・旧厚田村）。一帯に生い茂る灌木の間を縫うように、海へと向かう細い道の途中に長らく「伊達邦直主従一行上陸



石狩市聚富に建つ伊達藩移住の地記念碑

とを聞き
実地調査の結果をもつて

開拓使にお願いし、トウベツ移住が決まった

はきびしかったが、この間に八人の新生児が誕生し、将来に明るい光をみる事ができた」とあります。

碑文は邦直の子孫である当時の当別町長、伊達寿之氏の揮毫による

の地」
と墨で記された一本の丸太が建てられました。それが立派な石碑に建て替えられたのは平成八年。国道からの案内ですぐわかります。

伊達邦直は、伊達市の礎となった伊達邦成の実兄で、伊達藩の支藩、岩出山藩藩主。主従の聚富上



本庄睦男「石狩川」文学碑
石狩太美の石狩川沿いに

陸は明治四年のことでした。現代でさえ人影のほとんどないような土地に入ったのは、政府から当初、ここを貸し与えられたからです。しかし砂地のためとうてい作物には適さず、前述の移住記念碑には「トウベツが開拓に適しているこ

「おためし暮らし」いかが

団塊世代の一斉定年でさらに加速した感のある田舎暮らしブーム。当別町は、この移住促進に町を挙げて取り組んでいる自治体でもあります。

そもそも同町が札幌に近い住宅地として注目されるようになったのは、二十年ほど前に始まったスウェーデンヒルズの造成です。緑



多いならかな丘陵に北歐風の家並みが美しく、道内外からの転入が徐々に増えています。



右はJR石狩当別駅
下はスウェーデン風
同じく石狩太美駅

その一方で近年、道内市町村の間でも盛り上がりつつあったのが定年移住促進の動き。平成十七年には当別町も参加して北海道移住促進協議会が設立されました。早速、担当窓口を設け、移住専用のホームページを開設するなど、積極的



石狩川をまたぐJR学園都市線

児島からもあります」とのこと。ホームページや同町広報にも、下関市やひたちなか市などからの移住者の声、快適な生活を楽しんでいる生の声、載せられています。町内の様々な業種が一つになって協議会を結成し、収穫や遊びなどの体験をしてみようという活動も見逃しません。



移住をPRする
当別町のパンフレット

最近の新しい試みは「おためし暮らし」。数日間、町内に用意した賃貸マンションなど専用住戸での生活を提供しようというものです。料金はスウェーデンヒルズの一戸建てで夏は一カ月十七万円。着るものと携帯電話さえ持参すれば、諸設備を使つての自炊OKという段取りになっています。

来た道、 行く道。

様々な先輩がいるからこそ
二十一世紀があるんだよ——
スローコミュニケーションを求めて。

本欄への自薦他薦を
お待ちしております。

皮のパーツを縫い合わせて
甲の部分を作っていく

少し年配の方なら「小さな靴屋さん」という歌をご存じかもしれません。町の小さな靴屋さんはいつ来ても忙しそう、でも胸に秘めた夢がある——こんな歌詞でした。いまでは靴を求めるといえば、専門店やデパートで売っている既製品がほとんどという時代に、この歌のように朝から晩までトントン、トントン、注文靴の製作に向かっている遠藤昭一さん(七三)、昭人さん(四二)親子の店をたずねました。

父親の昭一さんがこの道に入ったのは昭和二十六年。まだ徒弟制度が残っている時代で、札幌市中央区の靴店での十年間の修行を経て、自分の店を持ちました。その後、ずっと弟子を取らなかつた昭一さんに、靴作りとは無縁のサラリーマン

だった昭人さんが弟子入りしたのが七年ほど前。

「職人の後継者難の時代に、自分も技術を身につけて父の後を継ぎたい」(昭人さん)との決断でした。

現在、仕事の大半は昭一さんと二人三脚ですが、すでに靴作りの全工程一人でこなせるほどの腕前に。さぞかし師匠の指導は厳しかったのではと聞くと、昭人さんは「昔は先輩の技を見たり盗んだりして覚えたのですが、現代ではそんなやり方は通用しないと父も感じていたでしょう。息子の性格も知って教



縫い終わった靴の上部を木型にかぶせ、釘と針で中敷に固定していく



遠藤製靴店
札幌市厚別区厚別中央2条2丁目3-22
TEL (011) 894-3052

えてくれていた」と感謝の念を。

靴作りの作業工程は大きく分けて製甲(靴の上部、甲の部分)、つり込み、底付けの三つですが、まずはお客の足の寸法を採って型紙作り。その型紙に沿って革を断裁し、パーツをミシンで縫い合わせていくことから製甲が始まります。



上が皮を縫うミシン、下が靴底を付ける機械ともに年代物



親子で足の悩み解消 二代目は脱サラの 小さな注文靴屋さん

遠藤 昭人さん

遠藤製靴店(札幌市)



並行して、お客の足と同じサイズの木型に別の革を巻きつけ、微調整しながら採寸とおりの足型を作りま

す。これに縫い合わせた上部をかぶせ、引っ張りながら中敷の底革に釘で固定していくのがつり込みです。固定し終えたら再度、少しアールのかかった布団針で縫い直しながら、釘を一本一本抜いていって上部の完成。革底かゴム底を接着させて一足の仕上がりです。

昭人さんによると現在、札幌市内で注文靴を作っている店は数軒しかないとか。既製品、量販店の攻勢は否めません。



札幌商工会議所が認証する注文靴で歩きを快適に——

道具で

道草30年

年のせい、さりげない心遣いがうれしくなるこのころ私の誕生日をめぐって心温まる人との出会いがあった一人は現代美術家、もう一人はとあるレストランの店主

坂一敬

レトロスペース坂会館・館長（坂栄養食品開発部長）

その日、レトロスペースの二階で作業をしていたら、階下から私を呼ぶ声が聞こえた。下りてみると、大竹伸朗さんが立っていた。彼と会うのは久々だったので、これから札幌で開催されるという彼のトークショーの開場時間ギリギリまで話をした。この前米館したときに、彼から「日活ロマンポルノのポスターが全部あるけどいらない？」と言われたのだが、「貼る場所もないから」と断ってしまった。「そうだね。レトロスペースの格調が落ちるかもね」なんて会話を交わして以来だ。

帰り際、彼が十代の頃を過ごした別海町の牧場で展示されている作品の、パノラマ式の図録を二冊置いていってくれた。彼が帰った後、パノラマを開いてみると、そのうちの一冊に彼の名前と日付が書いてあった。ふと見たその日付は私の誕生日であった。さりげなく祝ってくれたのだろうか。

その日、友人と夕食を取るためある店に入った。ジュースで乾杯した後、ホットの開き・おしんこ・みそ汁・ご飯といったメニューを食べ、食後に紅茶とケーキを注文した。が、あいにくケーキはバームクーヘンが

一個あるきりだと店の女の子が言う。まあ一個を二人で分けて食べればい

いだろうと思ひ、その最後のバームクーヘンを頼んだ。

ふとテーブルの横を見ると、ある催しのパンフレットが置いてあり、大きめの字で今月と来月、つまり十一、十二と印刷された数枚が目に入った。連れがその数字を見て、

ケーキが運ばれてきた。さきほど注文した二個のバームクーヘンだけと思いきや、大皿の真ん中に置かれたバームクーヘンの周りには、薄く切ったリングやグレイプフルーツ、その上に生クリームがたっぷりとか

かっっており、色とりどりの小さなチョコレートやゼリーも散りばめられていて、ちょっとしたパースディ

さりげない心遣い、大竹伸朗さんと私の三ツ星レストラン。

「あー、館長の誕生日だ」と声を上げた。ちょうどその時、この店の主が我々の横を通り過ぎるのが見えた。店主は店の女の子に「ちょっと買い物に行ってくる」と言い残して出て行った。しばらくして体を濡らして戻ってきた彼は、大きなレジ袋を抱えていた。どうやら外はみぞれ混じりの雪らしい。

やがて我々のテーブルに紅茶と

ケーキになっていた。それらが盛り込まれた大皿は、今は廃業したホテルのマークが印刷されており、少し欠けてはいたものの赤い縁取りがとても鮮やかであった。味もたいそうおいしくて、口の中でゆつくり甘くとけ

お茶を飲もうと紅茶カップを手にしてちょっと驚いた。裏をひっくり返してマークを確かめるまでもなく、



大竹伸朗さんとレトロスペースのスタッフ（大竹さんは四国の宇和島市を拠点に多彩な活動をする現代美術家）

それは間違いなくロイヤルコペンハーゲンだったのだ。しかも一客が三万円はするであろう上物。こんな立派なカップでお茶を飲むのは初めてである。長年レトロスペースを運営しているうちに、少しずつものを見る目が養われていることに感謝した。そうでなければ店主の心遣いが理解できなかったかもしれない。

おそらく彼はその日が私の誕生日であることを会話で知り、バームクーヘン一個ではという気遣いから雪の中、材料を買いに出かけたのだろう。そうして即席のパースディケーキをこしらえ、大皿は少々欠けてはいたものの、紅茶カップはとっておきのものをあえて使ってくれたのだ。その時バックに流れていた曲

は「青い山脈」で、なつかしいひとときを過ごすことができた。

帰り際、一人前千二百円を支払った後、特製ケーキとカップのお礼を店主に言うと、彼いわく「どういたしまして。うちはこう見えても高級店ですから」。

外は小雪がちらつき、十一月の冷たい風が吹いていたけれど、私の心の中はとても温かくなっていた。この年齢になつてこんなに素敵な誕生日を過ごせるとは思ってもみなかった。もう少し天気がよければ円山公園を抜けて歩いて帰ろうかと思ったのだが、歩くには雪と風が強すぎた。連れが車で家まで送ると言ってくれたので遠慮なく同乗させてもらった。少し遠回りをしてもらい、ヒーターで暖まっていく車内で、先ほどの余韻をゆつくりと楽しんだ。

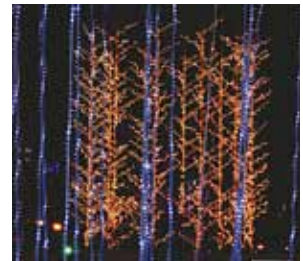
そう、私は誕生日の夜を、札幌きつての三ツ星レストランで過ごすことができたのだ。多くの人はこの店の外観や内装、什器、そのどれにも星は付けられないかもしれない。そんなうわべだけでものを見る人たちにこの店のことを話すつもりはない。年を取ると人は偏屈になるものなのだから……。

何かに追い立てられるように過ぎていく毎日。いつもそこにある時計に、足を止めることを忘れていませんか。

天地にともる 都会の 漁り火

寒い季節になると夜間の外出も億劫で、街の中心部の彩りを知らない人も多いでしょう。「さっぼろホワイトイルミネーション」が練り広げられている大通公園や札幌駅前通りの、幻想的な光が観光客に人気です。期間中はテレビ塔の電光表示もいささか野暮ったく見えるほど。時には身を切る

ような外気温でも、暗がりには光があれば人が集まるのは必定で、それは天地にともる漁り火のようでもあります。ちなみにイカは漁り火の明るさに引かれるのではなく、船の下の暗がり求めて群れるのだとか。一極集中と批判されても、特有の陰影がある限り、人は都市に集まってくるのです。



Now Printing

●本づくりのパートナー
(社)印刷紙工

居間で本づくりセミナーを
自分史など本をつくりたいと考えている人のために、出前の本づくりセミナーを承ります。三人以上のお集まりで会場をご用意いただけます。日時をご相談の上、印刷担当者や編集者がお伺いしているところとアドバイスさせていただきます。ご自宅の居間でも結構です。もちろん無料です。

記念誌は未来への道しるべ
企業や団体の十年を一区切りとする創立周年、二十周年、三十周年と歴史を重ねていく度にその歩

つくってみませんか
句集・歌集・詩集・小説・随筆集…
自伝・体験記・回想集…画集・写真集



B6判・272ページ

葦牙叢書第九十一集
句集「ぜんまい」
佐瀬晶子

俳句を趣味とする人にとって、一冊の句集を上梓するという事は、自己の足跡をまとめた自伝出版に等しいでしょう。句集のタイトルや俳

風から自ずとその人柄もしのばれるものです。

タイトルの「ぜんまい」とは「ぜんまいの会話いつも風の中」という藻岩山麓での一句から。意表をついているようですが、高2のお孫さんの扉押し絵と相まって、ほのぼのとした内容が想像できます。

とはいえ、著者は20代から句会に入り、70歳を過ぎた今日まで活動を続けています。収めてあるのは昭和60年以降の453句。

風船の影曳いてゆく乳母車
ラベンダー真っ只中に恋があり
千羽鶴千の初日を貰ひけり
など、初孫誕生、長男結婚、主人入院といった日常を詠んだものから秋落暉ミレーの絵とも石狩野紅白の玉入れ朱夏の天を指すといった表現の妙も。

みを記録しておかなければ資料が散逸、功績のあった人も物故していきまます。未来への道しるべ、歴史はきちんとまとめておきたいものです。企画、編集、印刷、どの段階からでもご用命を承っております。

小紙を無料で差し上げています
慌しい時の流れに、ほっと一息つける話題を提供していきたいと願っている小紙。ご希望の方には無料で定期的にお送りしております。印刷紙工までお申し込みください。